

米づくり情報 (NO . 8)

令和元年8月7日

伊万里・西松浦地区農業技術者連絡会作物部会

1 気象概況 (アメダス観測地：伊万里)

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
7月	1	24.6	22.5	28.4	25.6	21.7	20.2	84.2	53.5	17.9	7.1
	2	25.4	23.6	29.3	27.6	22.5	21.3	70.2	30.5	21.3	14.6
	3	26.1	23.3	30.1	26.2	23.0	21.3	60.6	58.0	24.1	14.7
	4	26.6	25.0	30.9	27.8	23.4	22.7	54.2	105.5	28.0	9.9
	5	27.0	27.5	31.5	30.4	23.6	25.6	47.4	47.5	32.0	11.6
	6	27.3	28.6	31.9	32.7	23.7	25.6	44.2	15.0	40.7	46.4
8月	1	27.4	28.9	32.2	34.0	23.7	24.9	28.7	0.0	34.0	55.9
	2	27.4		32.2		23.7		31.2		32.8	
	3	27.3		32.0		23.8		35.9		30.1	

- 1) 7月6半旬～8月1半旬は平年と比較して、平均気温は1～2℃程度高く推移した。
- 2) 7月6半旬～8月1半旬は平年と比較して、降水量は少なく(平年比21%)、多照となった(平年比137%)。
- 3) 本年の北部九州の梅雨明け発表は7月24日となった。

2 生育状況 (8月7日)

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	莖数 本/m ²	主稈 出葉数L	葉色 SPAD	概要
夢しずく 6/4移植 東山代町脇野	本年値	(出穂走り8月6日ころ)				<ul style="list-style-type: none"> 出穂期の平年値は8月1日(本年は8月7日現在で出穂走り～出穂始め)
	平年値	出穂期8月1日				
	平年比	-				
ヒノヒカリ 6/19移植 松浦町桃川	本年値	74.3	387	12.0	37.1	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年より低く、莖数は少ない。 主幹出葉数は平年より少なく、葉色は薄い。
	平年値	77.6	482	12.5	37.8	
	平年比	96	80	-0.5	-0.7	
たんぼの夢 6/18移植 松浦町桃川	本年値	68.4	419	12.1	42.0	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年よりやや低く、莖数は平年よりかなり少ない。 主幹出葉数は、平年より少なく、葉色は薄い。
	平年値	69.8	484	12.3	42.5	
	平年比	98	87	-0.2	-0.5	

※夢しずくの耕種概要は、稲作情報 No.2 を参照。

※ヒノヒカリ、たんぼの夢の耕種概要は、稲作情報 No.3 を参照。

3 今後の管理

1) 山間早植え水稻（5月移植）

- ・5月上中旬移植の夢しずくは、現在、乳熟期～糊熟期となっている。
- ・5月下旬移植の夢しずくは出穂期を迎えている。
- ・穂揃期以降は間断灌水を行い、土壌を固めると共に根の活性化を図る（土が柔らかい圃場では、間断灌水の断水期間を長めにし、土を固める）。また、収穫の7日前までは間断灌水を行い、必ず圃場に水を通すようにする（早期落水による米の品質低下を防ぐため）。

2) 普通期水稻「夢しずく」

- ・まもなく出穂期を迎える。
- ・穂孕期から穂揃期にかけては、イネの用水要求度が高い時期であるため、水が切れることがないように圃場の水管理を徹底する。
- ・特に本年は移植後の生育が良好であり、葉がうっぺいした圃場では、「いもち病」等の病気が発生しやすくなるため注意深く圃場を観察し、適期防除に努める。

《参考 8月6日時点の生育状況》（伊万里市二里町）

移植日	草丈(cm)	茎数(本/株)	葉令	備考	出穂期
5月23日移植	-	-	-	標高100m	8/2ころ
6月6日移植	91.3	21.7	11.3	標高180m	-

3) 普通期水稻「たんぼの夢」、「ヒノヒカリ」等

- ・中干し作業は終了し、間断灌水へ移行する。
- ・穂肥施用時期であるが「葉いもち病（褐点型・停止型）」の発生が確認されるので、発生状況や発生部位によっては穂肥施用量を減量する（上位葉に発生が見られたら穂肥を控える）。

《参考》出穂期の平年値

ヒノヒカリ	8月26日頃
たんぼの夢	8月27日頃

- ・「いもち病」の進展型病斑が確認された場合は、速やかにオリブライト粒剤等で適切に防除を実施する。
- ・除草剤処理後の水管理が徹底できず、雑草の発生が多い圃場においては、中後期除草剤の対応により適期防除につとめる。

4) 共通

○主な病害虫の防除適期

病害虫名	稲のステージ 出穂前後日数	防除適期							
		-15	-10	-5	0	+5	+10	+15	+20
紋枯病	並発生の場合	←→							
	多発生の場合	←→		←→					
穂いもち	並発生の場合				←→				
	多発生の場合				←→		←→		
カメムシ類	並発生の場合						←→		←→
	多発生の場合						←→		←→

図3 紋枯病、穂いもち、カメムシ類の防除適期

○ウンカ類

※8月1日に農業技術防除センターより「トビイロウンカ」の発生予察注意報が発表された。




※7月30日～31日にかけての農業技術防除センターによる県中西部を中心とした臨時調査（33圃場）では、トビイロウンカの発生圃場率は60.6%であった（伊万里市の調査では5圃場中1圃場で幼虫1頭確認）。これは、8月上旬の定期調査での発生圃場率（平年9.1%、本虫が多発生した2013年は37.5%）より高い。また、増殖率が高い短翅型雌成虫が既に散見されるとともに、一部圃場では本虫の急激な増加を確認しており、嬉野市の調査においては10株当たり218頭（成虫45頭、幼虫173頭）確認されている。

※セジロウンカの飛来量が少ない年は、トビイロウンカが増殖率が高まる傾向にあり、本年は、セジロウンカの飛来量が少なく、トビイロウンカが増殖に好適な条件となっている。

※7月24日発表の九州北部地方の3ヶ月の予報では、8月の気温は平年並か高いと予想され、本虫の増殖にやや好適な条件となっており、発生が更に増加し被害を生じる恐れが高まっている。

※特に、フルスロツトル箱粒剤ではなく、フイグットプリンスリンバーL粒剤等を使用している圃場では、注意して圃場を観察しウンカ類の発生状況把握に努める。

ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中～老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウンカ	白っぽい	灰白の斑紋	 : 真横
トビイロウンカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	 : 真横～やや斜め後ろ
ヒメトビウンカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 (体側の色が濃い場合あり)	 : 斜め後ろ

		トビイロウンカ	セジロウンカ	ヒメトビウンカ
幼虫	若齢			
	中齢～老齢			
成虫				

トビイロウンカ各世代の発生予測（2019年7月24日作成）

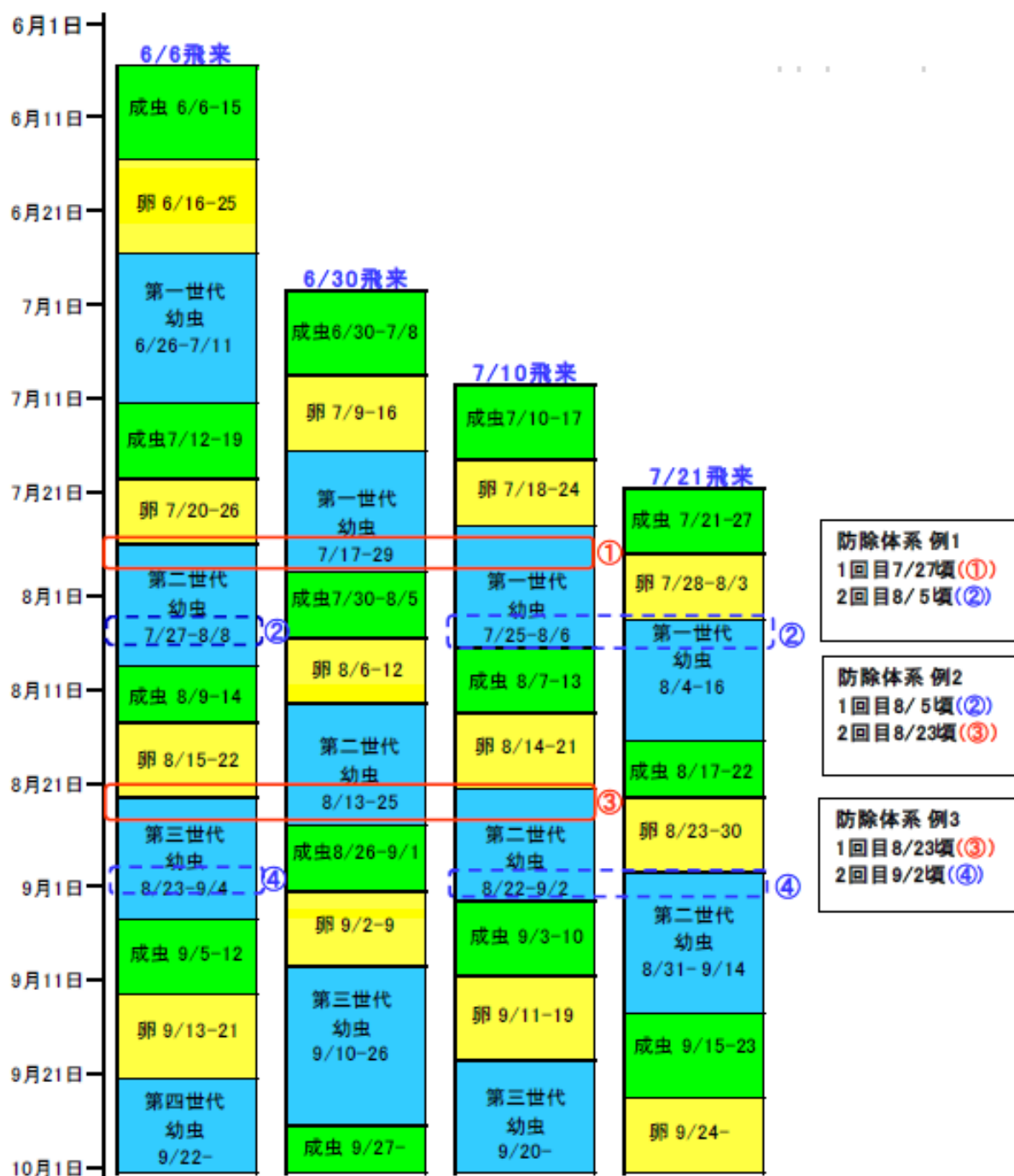


図2 トビイロウンカ各世代の発生予測（第5版、2019年8月1日作成）

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(第4版では7月22日までは実測値で以降は平年値、第5版では7月31日までは実測値で以降は平年値)を基に作成した。その結果、第5版は第4版と比べ、各飛来虫の、その後の発生時期は約0～1日遅くなったが、全体としてほとんど変わらない。

2. 普通期水稲には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。この例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。

3. 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。複数の飛来波の幼虫を、より効率的に防除可能と考えられる時期として「6/6、6/30、7/10飛来波を対象とした場合を実線赤枠(①、③)」「6/6、7/10、7/21飛来波を対象とした場合を点線青枠(②、④)」で示した。さらに、全ての飛来波を対象とした場合の体系防除の例(1～3)を、本図の右側に示した。

4. 田植え時期に加え、地域、水稲の品種、これまでの防除歴等の違いによってウンカの発生量は異なるので、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。

5. 今後の飛来状況、気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

〇いもち病

【山間早植え水稻】

- 葉いもちの発生が見られる圃場では、穂ばらみ期の防除を徹底するとともに、発生が多いと予想される場合には穂揃期にも防除を行う。

【普通期水稻】

- 葉いもちの発生が散見される（特に「夢しずく」「ヒノヒカリ」「たんぼの夢」）。
- 葉いもちの発生に注意して圃場を観察し、進展型病斑見られる場合は、早急にオリブライト粒剤等で臨機防除を実施する（ただし使用時期、使用回数に留意する）。
- 窒素過多は発生を助長するので、病斑が見られる圃場では施用量を減らすなど適切な肥培管理を行なう。

※いもち病の発生が著しい場合は、間断灌水における落水期間を長めにすることで病気を助長するところがあるので注意する。

令和元年産水稻生育期間気象グラフ (アメダス：伊万里)

西松浦農業改良普及センター

